2014.7 / VOL.17

ボーダレス・アートミュージアム
NO-MA ニューズレター

2014年、これまでボーダレス・アートミュージアムNO-MAを運営してきた
「(社福)滋賀県社会福祉事業団」は、「(社福)オープンスペースれがーと」と
ひとつになり、「(社福)グロー」となりました。これからもよろしくお願いします。

Jun 2014

ボーダレス・アートミュージアムNO-MAは おかげさまで開館10周年を迎えました

展覧会レポート　Timeless 感覚は時を越えて

Topic of NO-MA　10周年を迎えるNO-MAの新メディア

ABColumn　アール・ブリュットを巡るコラム VOL.7

地域インタビュー　あのひとの近江八幡スタイル
「アール・ブリュット☆アート☆日本」展
ボランティアスタッフ　山川 正續 さん

展覧会レポート
Exhibition Report

編：横井悠（本展担当）

開館10周年を迎えて第1弾となる企画展「Timeless 感覚は時を越えて」。出展者椎原保さんとNO-MAアートディレクターはたよしこが、2人の出会いや本展におけるアール・ブリュットの魅力について語り合いました。

はた：NO-MAが開館する3年前、2001年に京都造形芸術大学で一緒に展覧会(※1)を企画開催しましたね。時がたつのは早いなぁという印象で懐かしいです。今思うと、現代アーティストとアール・ブリュットの作品を一緒に展示した初めての展覧会でした。

椎原：僕も学生も企画者として、みんな対等な関係で展覧会をつくりあげました。

はた：出展者のアール・ブリュット作家3名の作品をみんなで見て、本人にも会いに行きましたね。

椎原保さんが展示構成を手掛けたNO-MA1階会場の様子

椎原：全てが初めての体験でした。彼らの作品に向き合うことで、作品をつくることの意味、またそれを展示することや展覧会を企画することなどあらゆることを原点から考えるきっかけになりました。

はた：展覧会全体の動機やコンセプトを尋ねられた時、論理的に言えたり書いたりできますが、それよりも前段階の、イメージを形にしてみたいという部分は、あまり論理ではなく、自分が生きているということへの感覚的な実感があるというか。

椎原：それを間近で感じて、本当にやりたければやっていいんだと気づかされました。当時からはたさんは、「ボーダレス」という言葉をよく使われていて、学生たちにも深いところで響いていました。

はた：「Timeless」展も、出展者の表現に「ボーダレス」という言葉を使いたくなるような、表現の真実を感じるわけです。現代アートとアール・ブリュット、人の表現の原点が見えるもの同士を展示すると、人間の表現衝動の根っこが見えてくるんですね。

椎原：NO-MAは、ずっとそれを守ってきていますよね。京都造形大での展覧会では、企画者として客観的な位置に立っていたかった。今展では出展者としてアール・ブリュットに関わり、会場でどう展示するかというよりは、アール・ブリュットの作家たちと一緒に展覧会をつくりたい、そのために一番豊かに感じられる空間のありかたを考えました。僕の中で最もシンボリックなのは、武友さんと三橋さんの作品です。

はた：今回、三橋さんの作品を実際手にとり、傾けたり距離を変えて見る鑑賞法が面白い！と思いました(※2)。それにより、漆黒の闇の中に今まで見えなかったカタチが立ち上がり、三橋さんの作品の不思議な構造に気づきます。また、彼が描く薄っぺらい紙は、持ってみると鉛筆の鉛やクレヨンなのか、ドキドキする重みを感じられました。

椎原：三橋さんの作品に近づいて生で見るというのは、ほとんど彼になりきって、彼のワークや、やったことの強さをそのまま見るということになります。たくさんの枚数を見たいとか総覧的になるということは、その次の興味として出てくるもので、それも受け入れる展示になっています。鑑賞者それぞれが自分の感性と向き合い、作品のエネルギーをグッと自分に近づけて見ることができる、とても貴重な展覧会だと思います。

「Timeless 感覚は時を越えて」
2014年5月2日(金)～7月27日(日)

【出展者】
遠藤一郎/椎原 保/武友義樹/筒井貴希/西澤 彰/三橋精樹

後援：滋賀県、滋賀県教育委員会、近江八幡市、近江八幡市教育委員会
協力：アイランドジャパン株式会社、湖北まこも、中島多吉商店、一般社団法人近江八幡観光物産協会、特定非営利活動法人しみんふくし滋賀

三橋精樹作品を前に

椎原 保
1952年、大阪府生まれ。美術家。1977年に京都市立大学美術学部西洋画科卒業。自身の作品を「日常感覚で感じられることを編集する作業」とし、空間全体を作品化した、その場でしか感じることのできない独自のインスタレーションを展開する。

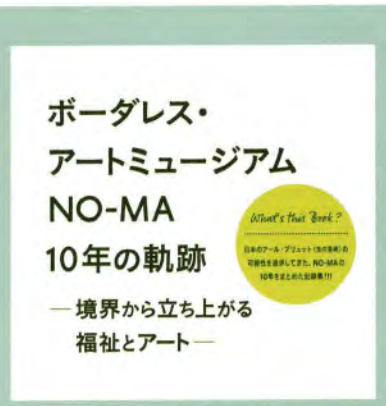
はた よしこ
NO-MA開館からアート・ディレクターを務める。西宮市にある知的障害者支援施設「武庫川すずかけ作業所」にて絵画クラブを主宰。

※1「共振するDNA―表現の内奥をさぐる―」展（2001年／主催：「共振するDNA」実行委員会／会場：GALLERY RAKU）現代アーティスト、障害のある作家、学生のコラボレーション展。
※2三橋の作品は桐箱の中におさめられており、鑑賞者はスタッフが箱を開封する所作に立ち会うところから作品に出会う。
※本誌発行以降、NO-MAウェブサイトにて対談の全編を公開の予定です。

ノマ トピ Topic of NO-MA

開館10周年を迎えるNO-MAの 2つの新メディア

2014年6月に開館10周年を迎えたNO-MA。NO-MAでは現在、その歴史を携えながら次の時代へと架橋する2つのメディアを企画・発信しています。双方のディレクションを担当するアサダワタルによる紹介をお届けします。



道なき道を歩んできたNO-MAの10年を体感できる書籍

6月4日、書籍『ボーダレス・アートミュージアムNO-MA10年の軌跡 ―境界から立ち上がる福祉とアート―』を出版した。全7章から成る本書は、NO-MAの2004～14年の10年間の取り組みをまとめたドキュメントで、関係者によって綴られる歴史とともに、カラー写真による展覧会カタログを収録。また、作家 田口ランディ氏、アール・ブリュットコレクション館長 サラ・ロンバルディ氏、パリ市立アル・サン・ピエール美術館ディレクター マルティーヌ・リュザルディ氏の寄稿、ならびに東京国立近代美術館主任研究員 保坂健二朗氏とグロー理事長 北岡賢剛氏による対談も収録している。福祉と美術が交差する境界領域（例えばアール・ブリュットなど）に注目することはさることながら、あらゆる物事の間に生じる「どちらとも言えない何か」「名付け様のない何か」に常に向き合い続ける態度こそが新たな時代を切り拓くことを、本書を通じて体感いただければ幸いだ。

NO-MAが
アール・ブリュットでラジオ始めました。

アール・ブリュットをきっかけに、ひとの営みについて考えるトークラジオ

NO-MAでは4月からラジオ番組「Glow～生きることが光になる～」（KBS京都ラジオ／毎週金曜日21:30～21:55）を企画・放送している。この番組は、「障害福祉の父」と言われる糸賀一雄氏の生誕100年を記念して企画されたラジオ番組を引き継ぐもので、根底に「福祉」があり、それを様々な文化的視点から語りなおしていくことに主眼を置いている。アール・ブリュットは福祉と芸術文化の接合点として最も象徴的な存在だ。まずそこに焦点をあてつつ、「なぜ人は表現せざるをえないのか」「生活におけるこだわりと表現における美意識のボーダーはどこにあるのか」といったことを多領域で活躍するゲストとともに語り明かしてゆく。また作家の自宅アトリエや福祉施設、精神科病院など現地リポートの放送を通じて、音声メディアだからこそ深く切り込んでいける現場の臨場感も、ぜひとも楽しんでいただきたい。

書籍・番組の詳細については裏面をご覧ください。

アール・ブリュットを巡る
ABColumn コラム VOL.7

美術コレクターからみた アールブリュットの魅力

田中恒子さん講演より

アール・ブリュットを巡る
トークシリーズ 視点8

【ゲスト】田中 恒子
美術コレクター、大阪教育大学名誉教授
日時：2012年2月18日(土)14:30〜16:30
会場：近江八幡マルチメディアセンター
情報会議室

文：アサダワタル
アール・ブリュットを巡るトークシリーズ
ディレクター

幼少期から絵画教室に通い、ずっと絵を描くことが好きだった田中さん。美大に進学したかったが親に反対され住居学を専攻する。そこから美しい豊かな住まい方を提案していく住宅研究者の道が開かれ、いつしか好きだった絵に対する関心が薄らいでいった。そんなある日、研究室にやってきた「風呂敷画廊」に売り込み営業され、ミロの絵を買ってしまう。そして、東京出張の合間に様々な現代美術ギャラリーに足を運び、そこで若き作家の素晴らしい作品に触れ、しかもミロよりずっと安い値段で売っていることに驚く。このような契機を経て1989年から「美術コレクター田中恒子」としての活動が始まった。そんな田中さんにとって最も印象深い作家の1人に、坂上チユキさんがいる。彼女は有名な現代美術作家であり、同時に、彼女の様々な特性のうちのひとつである精神障害の面が助長される場合においてアール・ブリュットを代表する作家として取り上げられることもある。坂上さんの作品を自らのコレクションの中でとりわけ大事にしてきた田中さんは、改めて本トークにてアール・ブリュットについて語ることの躊躇いを打ち明けた。

「私は、これまで自分がコレクターとして生きていたことと、アール・ブリュットとの関係を考えたことが一度もなかったんです。坂上さんについても、アール・ブリュットの作家だという風に全く考えていなくて、非常に優秀ないい作家だとしか思っていなかった。そこで自分がアール・ブリュットについて語れるとすれば、美術作品をコレクションするということの面白さ、あるいはその大事さだと思っています。美術関係の方は、コレクターがいないと食べてはいけない。また美術館が拡大していった景気のいい時代は過ぎ、個人のコレクターを対象にして、いかに美術が暮らしの中に存在することが楽しいかということを普及していかなければ、もうギャラリーももたないという時代でしょう。だから、皆さんにも作品とともに暮らすことがどんなに楽しいかということをわかっていただくのが、ささやかな個人コレクターとしての役目だと思っているのです」。

アール・ブリュットという言葉をわざわざ用いることの意味とは何か。聞き手の保坂健二朗さん(東京国立近代美術館主任研究員)はこう答える。「やがてなくなるといい言葉だと思います。ただ、それまでの通常のアートの世界では扱われることのなかったタイプの作品を〝こういうものもあるんだよ〟と知ってもらうためには、一度それに対して何らかの〝名付け〟を行う過程が必要です。そして名付けることと、コレクションをするということは近い関係にあると思います」。まだ名もない作家の作品や、既存のジャンルとして語り得ない作品を評価対象として浮かび上がらせること。それには、ある一定のボリュームの作品を集める行為を通じて「こういった作品群がある」と可視化しなくてはならない。そして、そのプロセスにおいて大事な役割を果たすのが、まさしくコレクターである。アール・ブリュットという言葉の名付け親であるジャン・デュビュッフェも、そもそも彼自身コレクターであったことがそのことのひとつの証明でもあろう。田中さんは「作品とともに暮らす、家族の一員として作品を自宅に招き入れるというその時間がいかに豊かで楽しいものかを少しでも知ってもらいたい」と述べつつ、コレクションという行為からこそ作家を経済的にも、普及面においても支えられるという新たな視点を示してくれた。今後の日本のアール・ブリュットを、より日常的な個人の営みとして支えていけるという希望を感じつつ、トークは幕を閉じた。

http://www.no-ma.jp/?p=4960

地域インタビュー
ohmi-hachiman local interview

あのひとの近江八幡スタイル

職人の町、近江八幡の町大工
「アール・ブリュット☆アート☆日本」ボランティアスタッフ 山川正續氏

文：木元聖奈(アイサアドバイザー)

今年3月、近江八幡の旧市街で開催した「アール・ブリュット☆アート☆日本」展。町屋など8会場で開催し、61名におよぶボランティアスタッフの方々に各会場で受付や来場者の対応をしていただいた。ここに最高齢の80歳で参加してくださったのが、山川さんだ。

昭和9年、船木町に生まれてから一時姫路に移り、父親を事故で亡くしたことをきっかけに、近江八幡へ戻られた。しばらく父親の実家である木村工務店(船木町)に身を寄せた後、母親の再婚で大工業を営む山川家に入り鍛冶屋町に居を定めた。そこは、まるたけ近江西川(仲屋町)の創業時の精肉屋で、義父がそこのお抱え大工だったという。立派な家には専属の大工や植木屋がいた時代だ。近所には、あのウィリアム・メレル・ヴォーリズさんの家(現在のヴォーリズ記念館)があった。近所の子どもたちが集まってキャッチボールをしているとやってきて、逃がしたボールを拾って投げ返してくれたという。「優しい人やった。背が高くて金髪で、颯爽と歩いとった。空襲中はヴォーリズさんのおかげで八幡に爆弾が落とされんかったってみんな言っとった」。

家業を継ぐため、小学校卒業から7年間、京都に丁稚奉公に行き大工の道を歩み始め、一本立ちしたいと努力して29歳で棟梁になった。その後、木村工務店で働き、駅やメンタームの工場、近江兄弟社学園など地域の顔とも言える建物の建築や修繕をされた。

展覧会ボランティアとして活動した際は、現在の町並みに昔の風景を重ねていたようだ。「八幡教会の通りや新町通りが一番賑わっとった。丸重金物店の正面はパチンコ店で、タイムズ仲屋町には映画館があった。稲枝(彦根市)で田んぼを引いていた馬を連れてきて、日牟禮八幡宮で物見やぐらを建てて競馬をしとったしな。八幡靴の工場やマッチ工場もあった。八幡堀沿いには瓦屋が並んで、船が八幡瓦や芝を運ぶのに行き来しとった」。

全てを測量して一から材木屋で切り出す方法から、出来合の部材を組み立てる方法に建築が変わり大工を辞めた後は、近江葬儀社を営む兄を6,7年手伝い、現在は日野町にある老人ホームに暮らされている。取材前日も草刈りや壁紙の貼り替えをされたそうで、テレビ台を作ったり、戸を修理したり「なにか恩返ししたいと思うやろ」と施設の大工仕事を一挙に請け負っているそう。お酒の話では顔がほころび、「好きな酒が飲めたら上等や。いつ死んでも」とベッドの上でいかにコップから水割りを溢さずに体重移動するか実演してくださった。

2015年3月、NO-MAは再び近江八幡界隈で展覧会を行う。またボランティアスタッフとして協力してもらえないか尋ねると「もっと暖かい時期にしたらええんや」とのお返事。今から3月が楽しみだ。

「アール・ブリュット☆アート☆日本」展
2014年3月1日(土)〜23日(日)

棟梁になった29歳の時に結婚。
日牟禮八幡宮にて1人娘の正美さんと。

野間の間
noma-noma vol.17
2014年7月 発行：社会福祉法人グロー 企画事業部 TEL 0748-46-8100 FAX 0748-46-8228 編集長：はたよしこ デザイン：竹岡寛文

NO-MAの新メディア

<書籍発行のご案内>

ボーダレス・アートミュージアム NO-MA 10年の軌跡
—境界から立ち上がる福祉とアート—

発行：社会福祉法人グロー

これまでボーダレス・アートミュージアムNO-MAを運営してきた「社会福祉法人滋賀県社会福祉事業団」は、2014年4月、「社会福祉法人オープンスペースれがーと」とひとつになり、「社会福祉法人グロー」となりました。

企画：ボーダレス・アートミュージアムNO-MA
（社会福祉法人グロー）

監修：アサダワタル　価格：2,500円＋税

2014年6月4日、NO-MAの10年間をまとめた記録集を発売しました。関係者によって綴られる歴史とともに、カラー写真による展覧会の記録を全216ページにわたって収録しています。NO-MA、Amazonにてお買い求めいただけます。

目次構成
PART1 軌跡から／PART2 表現の力／
PART3 展覧会の現場／PART4 世界へ／
PART5 地域で／PART6 福祉 アート 境界／
PART7 未来へ

<ラジオ番組のご案内>

アール・ブリュットをきっかけに
人の営みを考えるトークラジオ。
Glow ～生きることが光になる～

放送日時：毎週金曜日 21:30−21:55
周 波 数：1143-1485kHz AM, KBS京都Radio

2014年4月から、アール・ブリュットをきっかけに人の営みを考えるラジオ番組が始まりました。パーソナリティーは文筆家・音楽家のアサダワタルさん。そしてアール・ブリュットにまつわる現地からのリポートを社会福祉法人グローの田端一恵が担当します。放送エリア外にお住まいの方もぜひPodcastからお聴きください。

（音声は放送後の翌月曜日、祝日の場合は火曜日に更新します）

ボーダレス・アートミュージアムNO-MA開館10周年特別企画展

「快走老人録Ⅱ －老ヒテマスマス過激ニナルー」＋ 関連イベント

フレッシュであることと老化することは、真逆ではありません。新しいことは若い感性によってのみ生みだされるものではなく、長い人生の時間を持っているからこそ放つことができる、生々しく強靭な表現力があるのではないでしょうか。

様々な社会的規制から解き放たれ、他者の評価にもとらわれず、人生の最終カーブをブレーキもかけずにキュンキュンと走る快感は、もはや老人の余暇活動ではなく、老人になることの醍醐味である「生」の力なのです。

そんな力みなぎる本展、ご期待ください。

【出展作家】折元立身、小西節雄、白井貞夫、中川幸夫、西之原清香、福田増男

2014年8月9日(土)～11月24日(月・振休)
※月曜休館。ただし祝祭日の場合は翌日休館。

11:00～17:00
関連イベント実施日は変更あり（詳細は右欄）

一般300円、高大生250円
中学生以下・障害のある方と付添者1名無料
「関西文化の日」11/15(土)・16(日)は観覧料無料

主催：ボーダレス・アートミュージアムNO-MA
社会福祉法人グロー
（旧(社福)滋賀県社会福祉事業団・
(社福)オープンスペースれがーと）

後援：滋賀県、滋賀県教育委員会、近江八幡市、近江八幡市教育委員会

協力：ART-MAMA FOUNDATION、
社会福祉法人蒲生野会ホームさくら、
社会福祉法人富士福祉会ふじ美の里、
中川幸夫事務所、
一般社団法人近江八幡観光物産協会、
特定非営利活動法人しみんふくし滋賀

「NO-MA de オープニングイベント ×折元立身ライブパフォーマンス」

出演：折元立身（本展出展アーティスト）
はたよしこ（本展アートディレクター）

2014年8月9日(土) 16:00～18:30
ボーダレス・アートミュージアムNO-MA
定員：20名（要予約）
観覧料のみ　※19:00まで特別開館

「八幡堀まつり NO-MA de ナイト」

2014年9月13日(土)・14日(日)
18:00～21:00 ※21:00まで夜間特別開館
ボーダレス・アートミュージアムNO-MA
無料　※18:00～21:00は観覧料も無料
はたよしこ（本展アートディレクター）による
ギャラリートークも開催します［予約不要・各回20分］
2014年9月14日(日) 18:00～/19:00～

一般公開「五感マンダラ －近江八幡の心象マップをつくる－」

近江八幡に長く暮らしている方と、五感体験にもとづいた地図をつくります。ふるさとの思い出を育てるワークショップの過程を公開します。

講師：上田洋平
（滋賀県立大学地域共生センター 助教）
日時はNO-MAウェブサイトにて随時ご案内します［全4回］
ボーダレス・アートミュージアムNO-MA
定員なし（予約不要）　観覧料のみ

「小室等 NO-MAコンサート ～ほほえむちから～」

出演：小室等（ミュージシャン・
糸賀一雄記念賞第十三回音楽祭総合プロデューサー）
2014年10月13日(月・祝)
18:00～19:30 ※入場17:30～
ボーダレス・アートミュージアムNO-MA
定員：30名（要予約／定員になり次第締め切り）
大人（高校生以上）2,000円、中学生500円、
小学生以下・障害のある方と付添者1名無料
※入場料は当日、受付にてお支払ください。

講演「ふくらの暮らし ～豊かな時間を創る・支える・そしてひもとく～」

講師：金森暢子（特別養護老人ホームふくら看護主任）
2014年10月25日(土) 14:00～15:00
ボーダレス・アートミュージアムNO-MA
定員：20名（要予約）
観覧料のみ

映画上映会＆対談「結い魂（ゆごん）」

対談：長岡野亜（映画監督）
×白井貞夫（映画出演・本展出展者）
2014年11月9日(日)
13:00～15:00（上映会）・15:00～16:00（対談）
奥村邸（近江八幡市永原町上8）　無料
定員：40名（要予約）

【編集長はつぶやく】

はたよしこ
ボーダレス・アートミュージアムNO-MA アートディレクター

もう10年も経ったのか。そう感じる一方で、まだ10年しか経っていないんだ、とも感じる。NO-MAの開館記念展「私あるいは私［静かなる燃焼系］」（2004年）を皮切りに、私は14本の企画展をつくってきた。しかし、思い起こせば、それ以前にも大津市の西武百貨店で「土踊る～アウトサイダーアーティストと鯉江良二～」展などのプレ企画展を2～3本開催した。我ながら、熱に浮かされて突進していたことに、今や少々あきれてしまう。

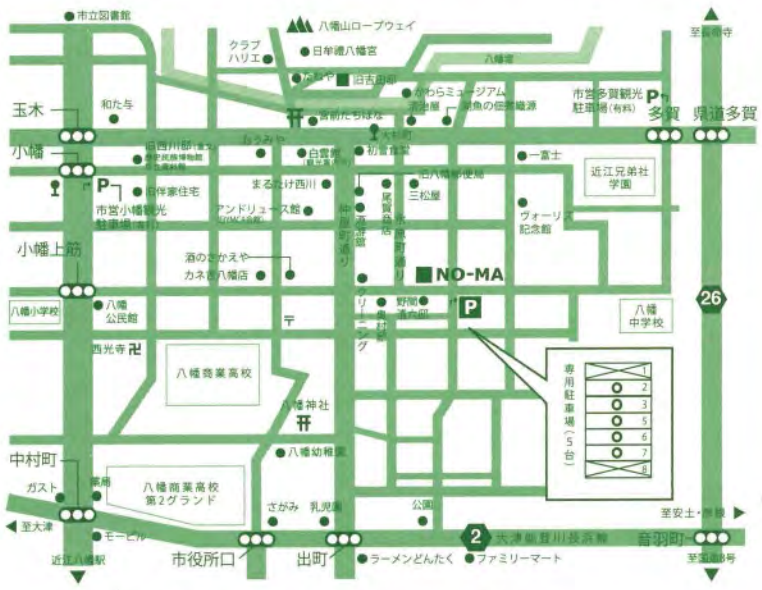
「ボーダレス・アート」という言葉は、NO-MA起ち上げの委員会である障害者アートギャラリー等整備事業ワーキンググループのなかで議論した結果誕生した造語である。私たちが何故そういう視点にこだわったかというと、当時は「障害者アート」などと呼ばれて一般作品とは区別して扱われており、「これらは魅力的な作品ではあるが、一般のアートではない」とされていた。

私は長年にわたって彼らの創作活動に寄り添ううちに、人がゼロから何かを創作するこのアグレッシブな行為は、人間の誰にも共通していると実感するようになった。そんな思いから誕生させたのが「ボーダレス・アート」という言葉であったのだ。

当時、ワーキンググループの皆さんのなかには、美術関係者や近江八幡の地域の方々など様々なメンバーが揃っていた。それぞれの立場、経験、情熱、知恵が混ざり合いながらNO-MAは開花してきたのだと、しみじみ思う。今や全国にもアール・ブリュットの美術館が5カ所にも増えてきている。嬉しいことだ。

これまでボーダレス・アートミュージアムNO-MAを運営してきた「社会福祉法人滋賀県社会福祉事業団」は、2014年4月「社会福祉法人オープンスペースれがーと」とひとつになり、「社会福祉法人グロー」となりました。

ボーダレス・アートミュージアム NO-MA
Borderless Art Museum NO-MA
滋賀県近江八幡市永原町上16
TEL/FAX 0748-36-5018
休館日：月曜日
（月曜日が祝祭日の場合は翌日休館）
E-mail no-ma@lake.ocn.ne.jp
http://www.no-ma.jp



バス　JR近江八幡駅から近江鉄道バス（長命寺行き）大杉町バス停下車　徒歩10分
車　名神高速道路・竜王ICより「近江八幡・国道8号」方面へ。国道8号「西横関」右折、「東川町」左折。県道2号「小船木町」右折、「出町」左折。（計30分）